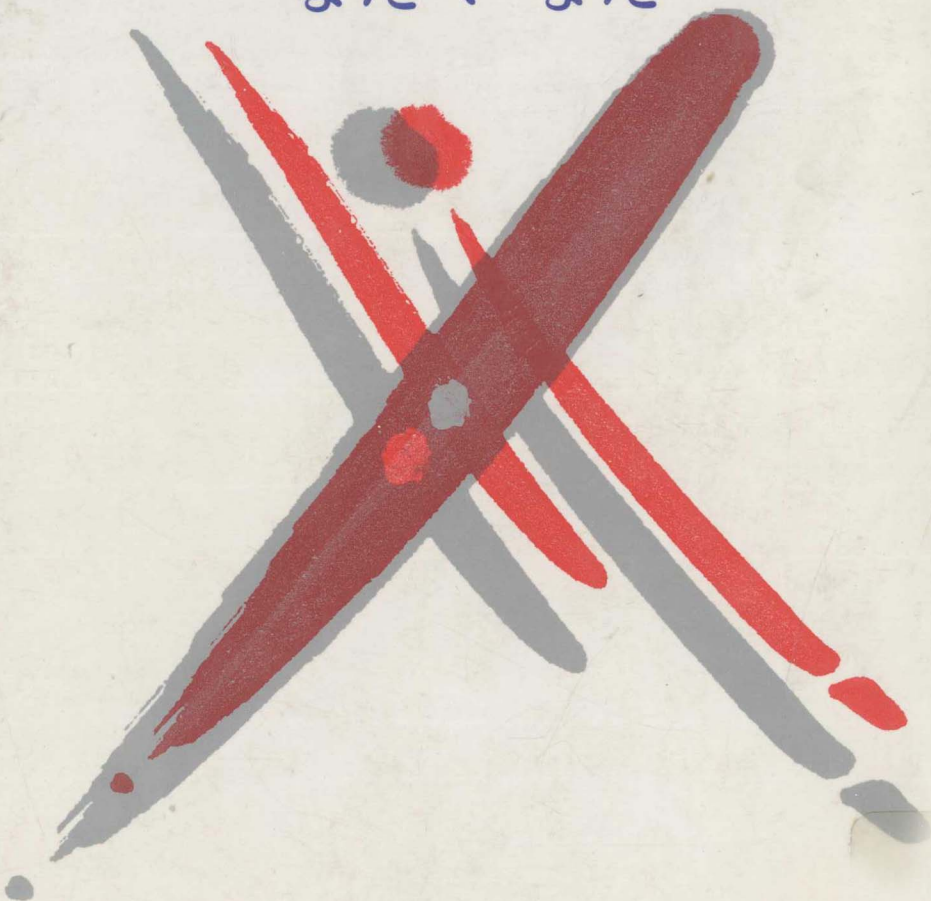


# どうでもいいように、 やっぱりどうでもいい話

なだ いなだ



# どうでもいいように、 やっぱりどうでもいい話

なだ いなだ



毎日新聞社

どうでもいいようにで、  
やっぱりどうでもいい話

一九八九年一〇月二〇日 印刷  
一九八九年一月五日 発行

著 者 なだいなだ

編集人 沢 畠 毅

発行人 川合多喜夫

発行所 毎日新聞社

〒二〇〇五 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版 製本 大口製本

© Nada Inada Printed in Japan 1989

ISBN4-620-30700-9

## 目次

どうでもいいように、  
やっぱりどうでもいい話

どうでもいい自己紹介 9

驚く時の声はキャーがいいという話

19

つき合いについて 30

ハのおくりもの 41

名前の話 52

効かない薬と効くクスリ 62

いって、いって！ 71

女流作家の「美人」に注意 80

天気予報外れ利用法 88

肩で風を切る 97

なんとなく世紀末

世の中、いったい何時代？ 107

消費は美德？ 114

口がなくて、なぜ話せる？ 121

記憶がだんだん遠くなる 128

だまされる快樂 135

今、おとなが危ない 143

現代の十四歳 151

代価のない安全はない 160

開けゴマ 168

ひよこ饅頭はひよこか、饅頭か？

176

スペインで見たこと

185

こころのスケッチ

ムニャムニャ

195

他人のいびき

200

こねる、つける、こく

206

照れる

212

ガマンと我慢

218

年 甲 斐

224

終わりそうな感じ

230

あとがき

装幀とカット

山本美智代

どうでもいいように、

やっぱりどうでもいい話





どうでもいいように、  
やっぱりどうでもいい話





## どうでもいい自己紹介

はじめての読者もあろう。簡単に自己紹介する、それが、礼儀だろう。

といったあとで、いうのも変だが、実は、礼儀というやつが、一番の苦手だ。なにしろ、ネクタイさえうまく結べない。大学を出た時、死んだ親父から、締め方を習うには習ったのだが、なぐんべんやっても、うまくいかない。結んだら最後、ほどけなくなってしまつて、風呂に入らずネクタイのまま寝たことがある。父親も匙を投げた。

そこで、ひらきなおつて、ネクタイを締めなければいけない場所には、こちらから出てやらないうことにした。偉くなると、どうしても、いろんな式に出席しなければならない。式にはネクタイを締めて出ねばならぬから、いつそのこと出世しないことに決めた。こうしてぼくは院長にも医長にもならなかった。

最近、ネクタイなしの人に遠慮を願うという店は少なくなつたが、昔は大きなホテルのレストランなど、ネクタイを締めていないと、入れてくれなかった。

パレスホテルの八階のレストランで、ある新聞社の社長さんと対談することになった。ところが、ポロシャツ姿のぼくを、ボーイさんがとがめて、どうしても中に入れてくれない。フロントに置いてある、清潔ではあるが、ただの色つきの細帯のようなネクタイを、なんとしても締めろという。こちらは、締められないのだ。そこが向こうには分らないらしい。

「入れてくれないなら、かまわないよ。ぼくは帰るからね」

と、たんかをきり、置き手紙して帰りかけたら、新聞社の人々が、慌てて追いかけてきた。もう二十年も前のことだが、「入れてくれないなら帰る」なんて、たんかをきったこともある。ああ、なんとさっそうとしていたこと。

さて、思い出すのはさっそうとしたそこまで、そのあとどうなったのか、どうも思い出せない。ごまかしてレストランに入ったのか、ワイシャツとネクタイを誰かから借りたのか、それとも、そのまま家に戻ったのか、急遽、別の店で対談をしたのか、どうも思い出せない。

変な話になった。最初から脱線してしまって申し訳ない。そうだ、自己紹介の途中だった。

ぼくは昭和四年生まれである。つまり一九二九年生まれである。この年、かの有名な世界大恐慌が始まった。タイミングからいって、ぼくがあの大恐慌を起こしたのではないか、心配である。ぼくはどことなく不景気な顔をしている。鏡を見るたびにそう思う。この間もある女性の誘惑を

断ったら、お金が逃げて行きそうな顔だ、とケチをつけられた。

年齢五十七歳。さて、五十七歳と書いて、一瞬そんなはずはない、と思った。計算を間違えたのではないかと。自分の計算能力を疑った。だが、これは全然計算の問題ではない。去年五十六歳であったことを覚えていたかどうかの、記憶の問題だ。

若い時、五十七歳なんていったら、大変な老人のように見えた。今でも若い人にはそう見えるだろう。だが、自分がその年齢になってみると、そんなふう感じたことが、うそのように思えてくる。あの時はどうかしていたのだ。五十七歳になってみると分かるが、それは全然大した年齢ではない。二十歳にちょっと毛がはえた程度でしかない。うそだと思うなら三十数本の毛を禿頭の上のせてみるがよろしい。三十なんて数は大したものではないことが、すぐに分かる。つまり、五十七歳とは、二十歳の僅か三十七歳年上であるにすぎないのだ。

身長は、最近ちょっと減って一六六センチ。以前は一六七センチあったのに、数日前測ってみたら、一六六センチ。自分でもびっくりした。この一センチの差は、なぜだ。まさか、盗まれたのではないだろう。身長をちょっとびり盗んで歩く怪盗の話は聞いていない。よく考えた末、以前は、知らず知らず、大きく見せようとして水増ししていたのだろう、という結論に達した。それなら、減ったのではない。年で減ったという考え方も、できないわけではないが、そういう考えは多くの好みではない。昔ちょっとびり水増ししていたことにしよう。

一六六センチは、今でこそ、低い方であるが、昔は平均的身長だった。つい先だって、ラジオ

の「全国こども電話相談室」で、

「どうやったら、身長を伸ばすことができますか？」

という質問を中学生から受けた。そこで、

「きみ、今どれくらいの身長しかないの？」

と問い返したら、

「一六六センチしかありません」という答え。

「しかありません」には参った。時代の変化をしみじみと感じた。

体重の方は現在ちよつと太って七十三キロ。つい最近三キロばかり増えた。こっさりいう。その分だけ余計なのである。

最近、週刊誌の、俳優や歌手の自己紹介の欄を見てみると、「好きな色」と「好きな言葉」という欄がある。それに血液型、星座までが加わる。そんな流行のあることを知らなかったので、一度「色はなに色を好まれますか」と質問され、恥をかいた。「なに色」というところが聞こえず、「色は好まれますか」といわれたと思ってギクリとしたのがいけなかった。相手は若い美しい女性であつたので、ますますギクリとした。そして心の動揺を隠して、「はい、人間ですからねえ、色は好みます。エヘヘ」と答えたあと、自分がなにかトンチンカンな返事をしたことに気がついた。

気がつかなければよかった。気がついたら、とたんに気分が悪くなった。

好きな言葉は「どうでもいい」である。「そんなことはどうでもいい」と、よく使う。これかも、よく使うであろう。なにしろ、好きな言葉である。この言葉が使えなくなったら、ぼくは、きっと数時間で死ぬだろう。

この言葉は、実ははじめからぼくのものではなかった。チェコの作家カレル・チャペクから教わったのである。話に行きづまって、この辺で何とか打開しないと、言葉の便秘症状が起きそうだとか心配になった時に、ためらうことなく使う。最近「その問題はひとまず、横において」などと英語の直訳のような言い回しをする人間が多くなったが、話だって横においてくのはまずい。邪魔になっていけない。つまり危険がある。だからぼくは「どうでもいい」とひとまず処分してしまう方を好むのである。

性格。もう分かっただろう。ぼくはかなり「ずぼら」である。「どうでもいい」を好きな言葉とする人間が、ずぼらでないはずがない。それから、オッチョコチョイでもある。これは、かなりのものである。

しかし、最近どういうわけか、ずぼらなぼくが、すごくものにこだわるようになった。ずぼらでない人は、スワ老化現象か？ と心配するだろうが、自分ではそうは思わない。長年の努力の



甲斐あって、ようやくズボラ病がチョッピリなおり始めたのだ、と思う。ぼくだってこの性格を、なおそうと努力をして来なかったわけではないのだ。今になって、ちょっぴり努力が実り、効果が現れてきても不思議はない。しかし、この程度の効果があがっても、ぼくのズボラがなおるまでには、あと百年はかかるう。

ここで、ちょっと話しかけたままにしていた、体重の話にもどる。体重七十三キロ、これは明らかに太り過ぎである。最近旅行している間に増えてしまったのである。旅をすると、どうしても太る。毎日毎日レストランでの食事が続くからである。出されたものを何も律儀に全部食べなくてもいいのだが、せっかくお金を払って注文しながら、食べ残すのは悔しいと思うと、どうしてもすっかり食べてしまう（なんという性格）。また、デザート抜きで勘定をたのむと、ボーイが残念そうな顔をするので（なんという気の弱さ）、どうしても注文してしまう。つまり、デザートはボーイのために食べているのである。それなのに、太るのはぼくだ。なんだか、割に合わない。

とはいいが、甘いものが好きでもあるのだ。この間、ウィーンに行った時は、ザヒャー・トルテを食べた。しかも、どうせ食べるならと、本物のザヒャー・ホテルに行つて、そのトルテを食べた。本場の本物のトルテである。これは一種のチョコレートケーキのことだ。ボーイにミット・オーダー・オーネ・ザーネ（生クリームをつけますか、つけませんか）といわれて、家内と